櫻井本『春日左拋御前法楽独吟百韻』訳注（四）

伊藤伸江・奥田　勲

宗祇の句集『宇良葉』には、集の末尾に三種類の独吟百韻が置かれている。このうちの最初の百韻である『春日左拋御前法楽独吟百韻』は、宗祇が五十六歳の時に、室町幕府将軍家の連歌会に初めて参加するにあたり、左拋社に祈念するところあって詠んだ百韻であった。この百韻から宗祇の百韻の手法を解明すべく、『春日左拋御前法楽独吟百韻』の訳注を試みることとした。本稿は伊藤が作成し、奥田との検討会議を経たものである。

【凡例】

一、底本は、櫻井健太郎氏本『宇良葉』に付載された宗祇の「春日左拋御前法楽独吟百韻」である。対校本に、①北海学園北駕文庫本（16－28－16－2、D613、写一冊、1000026 43）、②北海学園北駕文庫本（16－34－4－8、D601、写一冊、1000026 71）、③大阪天満宮文庫延宗本（359－11－4－14、写一冊、1002012 15）、④京大平松文庫春日末社左［ナゲ］（ママ）法楽（マイクロフィルム番号MINO：P5515）、⑤東大国文研究室蔵『連歌名句』（中世12・7－9）、⑥静嘉堂文庫連歌集書51所収本、⑦大阪天満宮文庫蔵長松本（『大阪天満宮文庫連歌書目録』れ5・11）、⑧天理図書館蔵本（『綿屋文庫連歌俳諧書目録第一』れ4・2－24）を使用し、校異を示した。

①～③、⑤は国文学研究資料館の紙焼き写真、④は京大図書館のHPを参照した。

一、注釈本文は、読解の便をはかるため、底本を歴史的仮名遣い表記にあらためて清濁を付した。原文は翻刻の形で示し「愛知県立大学日本文化学部論集」第九号（二〇一八・三）に掲載しており、適宜参照されたい。注釈本文にお

いては、原文の表記の誤りと考えられる箇所はあらため、あて字、異体字、送り仮名は標準的な表記に直して示した。漢字表記が自然である語句に関しては、全体の統一を考えて漢字に直し、難読語句には、校注者が括弧書きで振り仮名を付し、踊り字はすべて開いている。校注者による改訂部分のうち、特記すべきものは、注釈内に付記した。

一、各句には、百韻全体の通し番号を句頭に示し、参考として、各懐紙内でのその句の所在を懐紙の順、表と裏の別、表裏ごとの句の番号で表し、前句を添えた。

一、**【語釈】**にあげる和歌、連歌例は、後述引用文献による。百韻の読解に有効な際には、先例のみならず後代の作品も例示する場合がある。私に清濁を付し、片仮名など読解に不便な文字は必要に応じ平仮名に改め、漢字表記が自然である語句に関しては、全体の統一を考えて漢字に直した場合がある。

一、各句には、**【式目】【語釈】【現代語訳】**の説明項目を設けると共に、二句一連の連歌の中で句がどのように作用するか、及び独立した一句ではどんな意味を持つかに配慮して**【現代語訳】**の他に**【付合】【一句立】**の項目を設けた。さらに必要な場合には、**【考察】【補説】【他出文献】**の項目も設けた。

（三折・表・一）　月にや苔の袖もしほらん
五一　捨てし身はなほながき夜にね覚して

【校異】なし

【式目】述懐（捨てし身）　秋（ながき夜）　「述懐の心、…身をすてゝ」「秋の心、…長夜」（連珠合璧集）　ながき夜（時分）　ね覚（夜分）　夜与夜（可隔五句物）　寝覚に夢（可嫌打越物（新式今案））

【語釈】○捨てし身…世をいとい、出家した身。山奥に一人隠れ住むものである。「うき世をばすてし身なれどかくれ家とげに定むべき山陰ぞなき」（新葉集・1282・平惟材朝臣）。「今住む山や捨てし身の果て／思ふこと絶えたる嶺に庵〆

て」（竹林抄・1263・宗砌）。○**なほ長き夜**…それでもやはり長い夜。出家した身にも、そうでない俗人の身にも、同じように長い秋の夜。出家をすれば、煩悩を捨てているので、夜に物思いをすることはなくなり、夜の長さも気にならないはずであるが、出家したにもかかわらず、物思いを捨て去ることができない、つたない我が身の様を表現している。「捨てし身にさへ秋ぞくるしき／月はなど憂き世を知らで澄みぬらん」（新撰菟玖波集・3283／3284・庭田重有／後崇光院）。○**ながき夜**…秋の長い夜と、仏教語の無明長夜を重ねる。「おもふことまだつきはてぬながき夜のねざめにまくるかねのおとかな」（新勅撰集・暁述懐の心をよみ侍りける・1176・藤原家隆）。「長夜はかゝる物かとねさめして／泪の袖はいつかほさまし」（寛正二年正月二十五日何路百韻「声そ花」・87／88・行印／宗江）。「なみたふるなり長夜の空／さそわけむ後のやみちの末の露」（小鴨千句第八百韻・18／19・賢盛／宗砌）。

【付合】「苔の袖」から「捨てし身」を呼び込み、出家しても煩悩にまどう凡夫の姿を描き出している。「苔の衣トアラバ、…世をそむく」、「述懐の心、…苔衣（こけの袖）」（連珠合璧集）。

【一句立】世を捨てたこの身は、世を捨てたというのに、それでも秋の長い夜には目覚めて物思いにふけっていて。

【現代語訳】月を見つめての物思いからか、僧衣の袖も涙で濡れているのだろうか。世を捨てた身であるのに、それでもやはり、秋の夜長には、目をさまして物思いをしてしまっていて。それは悟りにたどりつけず、無明長夜に迷っているからなのだ。

【備考】「夜」は可隔五句物であり、本句の後には第五九句に詠まれる。

（三折・表・二）　捨てし身はなほながき夜にね覚して

五二　霧にも後の闇ぞ悲しき

【校異】ぞ③は（そ）　⑦は

【式目】秋（霧）　霧（聳物）　霞、霧、雲、煙（如此聳物）（可隔三句物）　霧にふりもの（可嫌打越物）　闇（夜分）

【語釈】○**霧にも**…現実の霧を見るにつけても。ここでは、煩悩が心をおおってしまう様子を、霧のたちこめる様により表現してもいる。霧はたちこめ広がって、月を隠すものである。「貪愛瞋憎之雲霧　常覆真実信心天」（証心偈）。「我身を雲と見れば迷はず／月清み胸の大空霧晴れて」（竹林抄・雑下・1471・宗砌）。○**闇**…暗闇と心の闇をかける。「心の闇」は、親子の情、恋愛感情などで心が惑わされている様子。こうした迷妄の思いが心に満ちている様をいう。「はれやらぬ心のやみのふかき世にまどろまでみる夢ぞかなしき」（続千載集・釈教・「未得真覚恒処夢中」・960・法印実寿）。「わすれずはのちのよてらせあきのつき／きりもこころのやみそかなしき」（出陣千句第六百韻・57／58）。「なかき夜の月のやみなる霧立て／秋に袂そあかすぬれける」（初瀬千句第十百韻・63／64・宰相／梁心）。「後のやみちはなにかてらさむ／名をおもふまなひにのりを忘るなよ」（老葉（吉川本）・1909／1910）。

【付合】「長夜」「後の闇」と、仏教関係の語彙でつなぐ付合。心の闇がおのづと連想される「後の闇」を詠むことで、三句続いた夜の句から、心情描写の句へと句境を変える布石が打たれている。「夜分のゝき所、…心のやみ」（連珠合璧集）。

【一句立】霧がかかるのを見るにつけても、その後の闇夜の様が、後世が闇であることを示すようで、悲しいのだ。

【現代語訳】世を捨てた身であるのに、それでもやはり、秋の夜長には、目をさまして物思いをしてしまっていて。それは悟りにたどりつけず、無明長夜に迷っているからなのだ。だから霧が出て後、闇夜となる秋の夜の様子こそは、私の心を今は迷妄が覆っていて、それゆえに自分の後世が闇であることを示すと思われて、悲しくてならないのだ。

【備考】「霧」は、第四一句にもあった。また第四九句に「露かすむ」があり、間に二句置いての聳物の登場である。霧に降物は打越を嫌うが規則には抵触していない。

（三折・表・三）　霧にも後の闇ぞかなしき
五三　恋しなば思ひもつきね胸の中（うち）

【校異】恋しなは　②⑤恋しさは　　ね　①ね（ぬイ）　②⑤ぬ

【式目】恋（恋死なば、思ひ）

【語釈】○**恋死なば**…恋しさに焦がれ死にをするならば。「人しれずわれ恋ひ死なばあぢきなくいづれの神になき名おほせむ」（伊勢物語八十九段）。「あともなきけぶりとやみんこひしなば世世にもゆべきむねのおもひを」（宗祇集・寄煙恋・196）。「恋しなは跡にうき名や立てまし／おもひのけふり雲もまかへよ」（表佐千句第三百韻・37／38・清玉／宗祇）。○**思ひもつきね**…思いも消え尽きてしまえ。○**胸の中**（うち）…付合では「胸の中」を前句の「霧」とつなぐことで、心の中が霧がたちこめたように曇り見えなくなっていることを言う。「しつかにとおもへはやすし胸のうち／いりもみなとか人の恋しき」（葉守千句第六百韻・69／70・泰諶／宗般）。

【付合】「霧」「闇」から意識される迷妄の世界を、恋の迷いに焦点を定めて句境を転換した。恋の執着の思いを断ち切れなければ、後の世で往生できない事は明らかであり、迷妄の闇にさまようことになる。

【一句立】恋の一句目。恋しくて焦がれ死にをするなら、この胸の中のあの人への思いも尽きてしまえ。

【現代語訳】自分の心が、霧に閉ざされているかのように迷いのうちにあるにつけても、死んだ後の世が闇ということが悲しいことだ。もしも恋しさのあまりに焦がれ死にをするなら、この胸の中の思いもつきてしまえ。

【補説】恋死には、相手を思うあまりに、自らの身を捨ててしまうことである。その場合、故人の抱いた恋の思いも葬儀の煙となって魂と共にたちのぼる。「恋ひしなばむろのやしまにあらずとも思ひのほどはけぶりにも見よ」（続後撰集・恋二・779・前参議忠定）。心敬には、前句を源氏物語中の柏木の恋死にと取り、忘れ形見の薫を「小松」として付けた句「恋しなは跡につらさや残らまし／いはねの小松いろもかくれす」（芝草句内岩橋・250／251）があり、また「なましゐに思ひいてゝ尋ね侍らんはせんなしと也」（159自注）と、亡き人を死んだ後に他者がしのんでも無益とする句「われたにすつる身をなたつねそ／恋しなはおもひいてゝもなにかせん」（芝草句内岩橋・158／159）などがある。このように他者の目から「恋死に」を詠むのが一般的な中で、宗祇のこの句は、自らが身体を失うならば、後の世の妨げとな

る思いもなくなってしまえと詠む点、視点はあくまでも恋死にする当人の意識に置かれており、恋の煩悩を歌句として扱う発想が珍しい。

（三折・表・四）　恋しなば思ひもつきね胸の中

五四　人のつれなき世をもうらみじ

【校異】⑧一句欠　うらみし　⑤うらめし

【式目】恋（つれなき、うらみ）　人（人倫）　世只一　浮世〻中の間に一　恋世一　前世後世などに一（一座五句物）

【語釈】○**人のつれなき世**…あの人が私に冷たい、そんな二人の仲。「秋になを人のつれなき程やみん／聞やむしの音しれや朝かほ」（河越千句第十百韻・87／88・修茂／道真）。「人のつれなき玉緒もうし／あるをみて我もはかなく契身に」（宗祇百句・雑・171／172）。「難面中もさのみうらみし／相おもふならひなき社恋路なれ」（園塵第二・1826／1827）。○**うらみじ**…恨むまい。「つく〳〵とおもへは夢の契りにて／けふもうき世そよしやうらみし」（葉守千句第四百韻・25／26・玄清／宗般）。

【付合】「思ひもつきね」と恋の思いがなくなることを願う、その理由を付句で示した。恋人への執心が極まって死んでしまっても、原因となった妄執が残れば来世も苦しむことになるゆえに、執着心も我が身と共に消えてしまったらよいとする。

【一句立】あの人が私に冷たい、そんな二人の仲をもつらく恨めしくは思うまい。

【現代語訳】恋しくて焦がれ死にをするなら、この胸の中のあの人への思いも尽きてしまえ。そうすれば、あの人が私に冷たくする、そんな二人の仲をも恨めしく思うことはあるまい。

（三折・表・五）　人のつれなき世をもうらみじ

五五　数ならでなさけを見むもいかならん

【校異】なし

【式目】恋（なさけ）「恋の心、…なさけ」（連珠合璧集）

【語釈】○**数ならで**…ものの数でもないこの身で。恋愛において、恋しい人にまったく相手にされていない状況をいう。「数ならて思ふにいとゝ名やたゝむ／我ゆへ人のうとからんもうし」（河越千句第十百韻・71／72・印孝／宗祇）。「いつかはかりのなさけをもみし／かすならてほたしなきよをすてねたゝ／なからへは身のまたいかならん」（三島千句第四百韻・22／23／24）。○**なさけを見む**…恋人から愛情をかけてもらうこと。「□□やけにうつゝにはにすうき人のなさけを見つる夢の名残は」（拾遺現藻和歌集・恋下・555・平重村女）。宗祇による、類似する詠出例としては、例えば前項で例に出した三島千句第四百韻の第二十二句がある。「かすならぬ身にはなさけのいかならむ／すてはやわふるよこそすまれね」（永正二年八月二十二日玉何百韻・17／18）。

【付合】前句で言う、恋人が自分に冷たいという状況が好転したとして、と自問自答する付合。恋の状況として定型化しているものを、あえて否定し別の方向から検討してみようとする、宗祇独自の発想が窺われる。

【一句立】ものの数でもないこの身に、あの人の愛情を受けることになったとしてもどうなろうか。

【現代語訳】あの人が私に冷たくする、そんな二人の仲をも恨めしく思うまい。あの人にとってものの数でもないこの身に、かりそめの愛情を受けるとしても一体どうなろうか。

（三折・表・六）　数ならでなさけを見むもいかならん

五六　都のつてにかかる山里

【校異】つてに　①伝に

【式目】雑　都只一　名所一此内に有べし　旅一　（一座三句物）

【語釈】○つて…間に人をおいて伝えること。また、人づての伝言。「稀にまつ都のつてもたえねとや木曽のみさかを雪うづむなり」（李花集・冬・442）。「三年をば夢と現に送りきて／都の伝は風もなつかし」（熊野千句第五百韻・93／94・頼暹／幸綱）。「身のほとをこそ人にうれへめ／はるかなる都のつてはうれしきに」（永原千句第九百韻・76／77・宗祇／紹永）。○かかる山里…「かかる」は、付合では、前句の「なさけ」と「かかる」とで関係しつながる働きをし、また、「かかる（かくある）」と掛詞になっている。一句では「かかる」は頼りにすること。「あはれてふなげのなさけのかかりなばそをだに袖のかわくまにせん」（続千載集・恋二・1150・崇徳院）。「年ふれば有るにまかせていとひこし世のたよりにもかかる山里」（春夢草・山家・1856）。

【付合】前句の「なさけ」から「かかる」を呼びこむ。「かかる山里」とは、都から遠く離れた辺鄙な山里であり、都人とは距離的にも境遇もかけ離れた状況にいる山里の女が想像されよう。

【一句立】都から人づてに伝えられる便りを頼みとする、このような（辺鄙な）山里。

【現代語訳】ものの数でもないこの身なのに、都人の思いを受けたとしてもどうなろうか。都からようやく人づてに愛情がつたえられる、このような辺鄙な山里にいて。

（三折・表・七）都のつてにかかる山里

五七　たづねよと花にやまがふ峰の雲

【校異】まかふ　③まよふ　⑦まよふ

【式目】春（花）　花近年或為四本之物、余花は可在其中（一座三句物・新式今案）　花可替懐紙。似物之花者此外なるべし。近年為四句之物。余花可有其内。花・紅葉と云ても為花四之内。花有面に桜嫌之。心の花・似物の花同前。又花可為三句之由有其沙汰。然而、可謂無念乎。所詮四句三句共以不可有子細歟云々。（連歌新式追加並新式今案等）　峰（山類・体）

【語釈】○たづねよと…たずねなさいと。何よりも花を求め尋ねるのは、風雅な教養人のなすことである。「よしの山こ

ぞのしをりのみちかへてまだ見ぬかたの花をたづねん」（新古今集・春上・花歌とてよみ侍りける・86・西行法師）。「面影に花のすがたを先だてていくへこえきぬ峰の白雲」（長秋詠草・崇徳院近衛殿に御幸ありし日、遠尋山花といふ心をよませたまひし時よめる・207）。「尋よと花は空にやにほふらん／夕にみれは山の端もなし」（河越千句第四百韻・3／4・修茂／宗祇）。○**花にやまがふ**…花と見まがう様子なのであろうか。白雲が遠目に山の花に見えること。「みよしのの花にまがふるしらくものはるるはそれもをしきなりけり」（師光集・さくら・8）。○**峰の雲**…峰にかかる白雲。「明日もたて薄花そめの峰の雲」（菟玖波集・4112・善阿法師）。「なにをまことか世には残りし／よしさらは花ともまかへみねの雲」（基佐集・79／80）。

【付合】山里を訪ねてこない都人を誘う花の趣を、花とまがう雲を使って詠み、句境を転換した。「行はうらみむことのはもなし／花にこそ山さともとへ宮こ人」（三島千句第七百韻・42／43）。なお、都から花も呼びこまれる。「都トアラバ、花」（連珠合璧集）。

【一句立】訪ねてこいと誘うかのように見えている、花かと見まがうような様子の、峰にかかる雲であることだ。

【現代語訳】都のたよりであるかのように、峰の雲が（都の方に）かかっている、そんな山里。その雲は、まるでたずねてこいというかのような、花の雲と見まがうばかりの様であることだ。

【備考】本句の「花」は似物の花。「花」は既に第二一句、第四七句にも出ており、この後、第七〇句、九五句に出る。第七〇句の「花」は心の花である。

（三折・表・八）　たづねよと花にやまがふ峰の雲
五八　ほのぼのかすむ明け方の空

【校異】ほのほの　⑥ほのかに

【式目】春（かすむ）

【語釈】○**ほのぼのかすむ**…ほんのりと霞んでいる。「波まよりほのぼのかすむ光かなながめのすゑやあまのいさり火」（正治後度百首・海辺・876・宮内卿）。「軒はにちかきうくひすのこゑ／山よりも夜はほの〳〵と明渡り」（永原千句第八百韻・4／5・祥祈／賢永）。○**明け方の空**…春の夜が明ける様子を「ほのぼの」と形容するのは、伊勢物語に見られる。「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身一つは元の身にして　とよみて、夜のほのぼのと明くるに、泣く泣くかへりにけり」（伊勢物語第四段）。

【付合】空の情景を、しらんできて霞みがかっている春の明け方の様子として説明する。

【一句立】ほんのりと霞んでいる明け方の空。

【現代語訳】訪ねてこいと誘っている花かと、見間違えてしまうような様子の、峰にかかる雲。そんな雲が、ほんのりと霞んでいる明け方の空。

【他出文献】下草（金子本）37／38（37句「ほの〳〵かすむあけほのゝ空」）
下草龍谷大学本33／34、下草（東山御文庫本）37／38

（三折・表・九）　ほのぼのかすむ明け方の空
五九　さえし夜の月に春風また吹きて

【校異】さえし　⑤⑥さへし

【式目】春（春風）　夜分（夜・月）　春風只一　春の風一（一座二句物）　夜与夜（可隔五句物）

【語釈】○**さえし夜の月**…いてつくように冷えこんだ夜の月。「つもるかとおき出でてみればさえし夜の月よりうすき峰のはつ雪」（宗祇集・朝雪）。「みねちかしあけほのたとるまとのゆき／いるそらいつちさえしよのつき」（成立不詳何路百韻「みねちかし」・発句／脇・高基／肖柏）。○**また吹きて**…（冷たい嵐の風の後に）また暖かい春風が吹いて。冷えこむ嵐の風が夜中に吹き、明け方には、今度は暖かい春の風が吹き気温も上がり始める様を描写している。「さえしよ

の嵐のすゑの朝霞消えかへりても又やたつらん」（雪玉集・あさがすみ（永正九年九月御月次）・60）。「山はみ雪のむら〳〵の里／さえし夜や嵐の末に明ぬらん」（那智籠・1628／1629）。

【付合】前句の霞みかがった明け方の空の様子から、付句で時を戻し、夜半の冷え込みを描写して、その冷え込みが春風によってゆるみ、霞も立ったのだと説明する。

【一句立】いてついた夜の空の月に、春風が再び吹いて。夜半の厳しい寒さを呼んできた風から一転して、明け方からは暖かい春風が吹きはじめる情景。

【現代語訳】ほのぼのと霞んでいる明け方の空の様子となった。冷え込んだ夜には、空の月は凍りつくような様子を見せていたが、今朝は春風が再び吹いてきて。

【考察】本句の「月」は、夜半は非常に冷え込むことがあるが、時期的には春になっている時期の月である。連歌新式では、春月は一座二句物。「春月只一　有明一（一座二句物）」。

また、宗長による下草注（広島大学本）は、次のようである。

三　ほの〳〵かすむ明かたのそら

四　さえし夜の月に春風又吹て

常には風吹ハくも霞も晴ゝとこそ待れ、これハはる風の吹はかすむといゑり、夜もすからさえし月の今朝かすめるを、はる風の長閑に吹て、明ほのゝかすめるさま返〻めつらしき風情にや。

風で霞が晴れると詠むのではなく、暖かな春風により霞み始めると詠む点を、めづらしき風情と注目し指摘している。

【他出文献】下草（金子本）37／38、下草（龍谷大学本）33／34、下草（東山御文庫本）37／38

（三折・表・十）　さえし夜の月に春風また吹きて

六〇　舟をいだせば雪ぞはるけき

【校異】なし

【式目】冬（雪）　舟（水辺・体用之外（新式今案））　雪三用之、此外春雪一　似物の雪別段の事也（一座四句物）

【語釈】○**舟をいだせば**…舟を漕ぎ出すと。「風もうきあたら桜の花の陰／舟を出だせば霞む磯山」（竹林抄・春・14・宗砌、新撰菟玖波集・雑・2453にも入る）。○**雪ぞはるけき**…雪をいただいた山がはるか遠くに見えていることだ。

【付合】近景には春風に漕ぎいだす舟、遠景は凍てつく夜のうちに積もって春風にはまだ遠い雪の情景と、遠近の対比をつくりだしている。

【一句立】舟を漕ぎ出すと、雪をいただいた山がはるか遠くに見えていることだ。

春から冬へ季を変え、空から水辺へと視線を移し、句運びの中で大きな変化を意図した句。

【現代語訳】いてつく夜の空の月に、春風が再び吹いて、舟を漕ぎ出すと、雪ははるか遠くに見えることだ。

（三折・表・十一）　舟をいだせば雪ぞはるけき

六一　伏しなれし竹のとまりの朝まだき

【校異】ふしなれし　①ふしなるゝ（れしイ）　朝またき　⑥朝速き（諸本により「朝まだき」と訓む）

【式目】雑　竹に草木（可嫌打越物）　竹与竹（可隔七句物）　朝只一　けさと云て一（一座二句物）　竹のとまり（名所）

【語釈】○**伏しなれし**…折れ伏したままである。常に伏している様子。竹は、雪により傾いたり折れたりしている状態を詠まれる。「夢かよふみちさへたえぬ呉竹のふしみの里の雪の下をれ」（新古今集・冬・673・藤原有家）。「竹トアラバ、連歌には竹は草木に二句へだてゝ付也　世夜共　ふし…伏見の里…」（連珠合璧集）。上記例で寄合となる「ふし」は節だが「伏し」に通ずる。「雪の軒端は風も音せず／なびきふす竹の枯葉のうちみだれ／あし分小舟棹ぞさはれる」（長享三年五月十一日何路百韻（さみだれは）・42／43／44・宗祇／宗元／宗祇）。○**竹のとまり**…加賀国の歌枕。石川県江沼郡大

聖寺川の河口、塩屋町あたり。伊勢国多気郡のあたりともいうが、『夫木抄』では「たけのとまり、未国」、『歌枕名寄』は加賀国とする。『梵灯庵袖下集』では、「一、竹の都、是は伊勢の斎宮の御事也。」「一、たけの浦、名所也。かゞの国にあり。同竹のはし、又竹のとまり共すべし。舟のとまる在所也。」としており、さらに『宗祇袖下』は、「一、竹浦・竹橋・竹のとまり、名所也。加賀国に有。」と『梵灯庵袖下集』を踏襲する。宗祇周辺では加賀国を考えていたのであろう。「こしのうみのたけのとまりをけさみればひとよをこめてゆきふりにけり」（夫木抄・十座歌合・1995・藤原兼盛、歌枕名寄7444にも入る）。「波寄する竹の泊のすずめ貝嬉しき世にも逢にける哉」（山家集・1195）。○**とまり**…舟着き場。「船トアラバ、とまり」（連珠合璧集）。○**朝まだき**…早朝に。「まだき」は、事柄がその時期ではないことをいう。「竹の葉は雪にしかれて朝まだき檐は数そふをちの山もと」（心敬集・里竹・412）。

【付合】「舟」に「とまり」を付け、「雪」からは積もった雪の重みでしなっている竹の様を導きだした。

【一句立】泊まりなれている竹のとまりの早朝。一句の中では、「伏しなれ」ているのは、竹であり、また眠りから覚めて出立する旅人でもある。さらに「竹」は名所「竹のとまり」を呼び込んでおり、こうした連想や歌語の重ね合わせによって、一句の喚起させるイメージが分厚く感じられる。

【現代語訳】泊まりなれた竹のとまりを、朝早く舟を出して出立すると、雪折れした竹に積った雪の景色は、はるかに遠ざかっていく。

（三折・表・十二）　伏しなれし竹のとまりの朝まだき
六二　羽（は）をならべつる鳥もいにけり

【校異】つる　③つる　④つる（たるイ）

【式目】雑　鳥只一　春一　水鳥、村鳥等之間一、浮寝鳥、夜鳥等は各別物也（一座四句物）、鳥与鳥（可隔五句物）　虫与鳥　鳥与獣如此動物（可隔三句物）

【語釈】○**羽をならべつる**…隣同士で羽を並べている。「羽をならぶ」は、大山祇神社の文明年間の連歌に多くみられる表現。長恨歌から「比翼の鳥」の恋のイメージも思わせる表現でもある。「朝夕の言ぐさに、翼（はね）をならべ、枝をかはさむと契らせたまひしに、かなはざりける命のほどぞ尽きせずうらめしき。」（源氏物語桐壺巻）。その点では、前句の「伏し」の横になって眠る様からも恋のイメージが漂う。「衣〴〵をおもひやりてや歎くらん羽をならべたる鳥も鳴こゑ」（雅親詠草・暁別恋・85）。「わすれすも花にちきりしとものきて／はをならへたるとりのさへつり」（文明万句第三千句第七百韻・19／20）。しかし、ここでは「伏し」と「羽をならべつる」から醸し出される恋のイメージは、鳥が去っていくことで、消えてしまう。○**鳥**…連珠合璧集は、「鳥トアラバ、鳥はもろ〳〵の鳥也。又庭鳥をも鳥といふ。句によりて（かはるべき也）」と、「鳥」だけでは種類は特定していない。「竹の葉の雪の下おれうちなびき／すゞめむらがる日こそ寒けれ」（宝徳四年千句第五百韻・35／36・日晟／竜忠）、「波寄する竹の泊のすずめ貝嬉しき世にも逢にける哉」（山家集・1195）等から雀も考えられるか。なお、第二三句にも「鳥」がある。

【付合】前句の「伏し」は鳥が眠ることをさすとし、「とまり」を鳥の寝る場所ととっている。「鳥も」と述べることで、早朝にもかかわらず、泊の旅人はすでに去っていったことが暗示されている。ただ、打越の句が、舟の出立であり、輪廻を感じさせるきらいがあるかもしれない。

【一句立】羽を並べていた鳥も去ってしまった。

【現代語訳】眠りなれた竹の枝をとまり木にして羽をならべていた鳥も、朝早く去ってしまった。

（三折・表・十三）　羽をならへつる鳥もいにけり
六三　契りてや常ならぬ道を忘るらん

【校異】忘るらん　①忘るらん（送るらんイ）

【式目】無常（常ならぬ道）

【語釈】○**契りてや**…約束しておいたのだろうか。「ゆくすゑのちとせを秋にちきりてや月もかはらぬかけにすむらん」（伏見院春宮御集・月契秋・38）。○**常ならぬ道**…ある物事がいつまでも続くわけではなく、終わりが必ずくるという道理をいう。無常のさだめ。「常ならぬ」は普通は「世」と結んで用い、無常の世を表す。「あさましやつねならぬ世を耳なれて猶おどろかぬ身とぞ成行」（草根集・おほかたこの比、山門発向の人〳〵、其外都にも、人〳〵身まかりぬる事きゝ侍るに、あさましくおほして・2079・永享五年十二月一日詠）。宗祇が文明四年冬までになした『専順宗祇百句付』では、春の行く道という語句から「つねならぬ道」と詠んでいる。この句でも、世ではなく道を使用している。「人の心のかはる世の中／花鳥もつねならぬ道と春暮れて」（専順宗祇百句付・113・宗祇）。

【付合】付句は、「（〜を）契りてや…らん」という形である。この形は、「〜を約束したから…のように安泰であろう」という祝意の文脈の歌に用いられることが多いが、ここは並んでいた鳥が飛び去ってしまったという、安定がこわれる内容の前句とあわせ、宗祇の工夫が見える。また、「契る」には恋の句の要素があるが、ここでは恋のイメージによることなく、むしろ無常のイメージを強く打ち出す。

【一句立】約束しておいても、どんな物事も必ず終わってしまうという道理を忘れてしまったのだろうか。

【現代語訳】仲良く羽を並べていた鳥も去ってしまった。（この先のことを）約束しておいても、どんなことでも続くことなく必ず終わってしまうという道理を忘れてしまっているのだろうか。

【補説】『専順宗祇百句付』の、宗祇句に対する西順注をあげる。

113花鳥も常ならぬ道と春くれて

有情非情共に無常世界なれは、其度きたれは花も根にかへり、鳥も古巣に趣く

に、人は世のことはさに貪著して、何に驚く心もなくつれなくのみ世にふるは、

花鳥の心にもおとれりとのこゝろなるへし

西順が説明するような、人は世事にまぎれて、無常の道理を忘れて安穏と世に生きているとする宗祇の意識は、第六三

句にも加えられていよう。西順の説明には、徒然草などの思想の影響が強い。思想そのものは非常にオーソドックスなものなので、次の六四句を使った転換が連歌師の技量の見せ所となる。

【他出文献】老葉（吉川本）791、老葉（毛利本）797、老葉（書陵部宗迅筆本）833、愚句老葉946

（三折・表・十四）　契りてや常ならぬ道を忘るらん

六四　神鳴る雨にかよふ夕暮

【校異】神なる　④神なり

【式目】恋（かよふ）　雨（一座一句物）　夕暮（一座一句物）

【語釈】○**神鳴る雨**…雷雨。伊勢物語第六段「芥川」を思わせる表現でもある。雷は恐怖を誘い、激しい雷雨では、外出がはばかられる。恋人同士では、雷雨をついて会いに来てくれるかどうかは愛情の深浅を示すことにもなる。「変はらじとのみあひ思ふ中／恨みずよ神鳴る夜半の空憑め」（竹林抄・恋連歌上・716・宗砌）。「君になにかはいのちおしまむ／風さはき神なる夜とてさはらめや」（三島千句第二百韻・70／71）。「逢みることやいなつまの影　と云句に　忍ふ身は神なる夜半も便にて」（萱草・853／854）。「とらふす野へよそれも物かは／狐なき神なる雨に山こえて」（毛利元就詠草・48）。○**かよふ夕暮**…宗祇のこの句以外には用例が管見に入らない。恋句で、「通ふ」「夕暮」という言葉のつながりは、逢えない恋情を詠むという古典詩歌の定型にはずれて、使用しにくいのであろう。ここは「神鳴る雨」が恋の妨げとなっていることから、こうした言葉のつながりを工夫したか。あえて定型をはずした実験的な句作りであろうか。

【付合】『愚句老葉』の宗祇自注が参考になる。「常ならぬ道」を、雷雨となった夕暮時の通い路ととりなす。

【一句立】雷雨の中、それでも通う夕暮れであることよ。

【現代語訳】恋人と約束したからか、いつもと違う道中であっても気にもならないのだろうか。雷雨なのに、恋しい人のもとへ通う夕暮れであることよ。

【他出文献】老葉（吉川本）792、老葉（毛利本）798、老葉（書陵部宗迅本）834、愚句老葉947

【補説】『愚句老葉』を示す。宗祇自身が、付句により場面転換をはかったことが語られている。

九四六　契りてや常ならぬ道を忘るらん

九四七　神なる雨にかよふ夕暮

自　前句は無常の連歌也、それを神なる雨のつねならぬおそろしき夕にも契りてやといひなす也

（三折・裏・一）　神なる雨にかよふ夕暮

六五　よそ目には思ふ仲とやいはれまし

【校異】には　①には（やイ）　思ふ　③忍（思）ふ　⑦忍ふ　とや　①とは（やイ）

【式目】恋（思ふ仲）

【語釈】○**よそ目には**…傍目には。よそから見ている分には。「よそめには玉しく野べとみつれども分きてきたれば道芝のつゆ」（久安百首・秋・37・上西門院兵衛）。「みるもうれしき人の玉章／よそ目にはあかれぬ花を折もちて」（看聞日記紙背応永三十年四月四日何路百韻・14／15・庭田重有／貞成親王）。○**思ふ仲**…恋しく思い合う仲。「あまのはらふみとどろかしなる神も思ふなかをばさくるものかは」（古今集・恋四・701・よみ人しらず）。「思ふ仲をば裂けぬ鳴神／夕立に相宿りせよ旅の友」（新撰菟玖波集・羇旅連歌上・2216／2217・覚胤法親王）。

【付合】前句の「神なる雨」に、古今集701番歌から「思ふ仲」という詞を付けた。

【一句立】よそから他人が見る分には、互いに恋しく思い合っている仲だと言われるだろうかしら。

【現代語訳】雷雨にもめげずに通う夕暮れ時。その様子を傍目には、互いに恋しく思い合っている仲だと言われるだろうかしら。

【他出文献】老葉（吉川本）813、老葉（毛利本）977、老葉（書陵部宗迅本）1011（旅の部に入る）、愚句老葉1152

（三折・裏・二）　よそ目には思ふ仲とやいはれまし

六六　一人一人に寝ぬる夜の床

【校異】ひとり〳〵　⑧たとり〳〵　寝ぬる　①ねぬる（たるイ）

【式目】恋（一人一人に寝ぬる）　寝ぬる（夜分）　床（夜分）

【語釈】○**一人一人**…一人ずつ別々に。それぞれに。次の第六七句とのつながりでは、旅人同士の宿の取り方に関しての表現となるが、本句では心が離れた男女の様子である。「まくらを月にいつかかはさむ／此秋もひとり〳〵の思ひにて」（宝徳四年千句第三百韻・84／85・竜忠／宗松）。「涙氷れるかた敷の袖／諸共に相思ふ中も有物を」（初瀬千句第七百韻・64／65・宗砌／日晟）。「まつともとはん友は覚えす／誰も皆ひとり〳〵のうき世にて」（文明六年年内立春何路百韻「春はまた」・22／23・宗祇）。「難面はあふ夜なからの人心／ひとり〳〵そねてわかれぬる」（老耳・664／665）。○**寝ぬる夜の床**…横になって寝ている夜の寝床。

【付合】外見上の様子を述べる前句に内実を示す句を付けた。

【一句立】一人ずつそれぞれで寝ている夜の寝床。訪れては来ても、愛情のない様を詠む。こうした観点から恋の様子を描く句は珍しい。

【現代語訳】外から見ている分には、相思相愛の仲だと言われているのだろうか。実際には一人ずつそれぞれ別に寝ている夜の床。

【他出文献】老葉（吉川本）814、老葉（毛利本）978、老葉（書陵部宗迅本）1012（旅の部）、愚句老葉1153

【補説】『愚句老葉』を示す。

一一五二　よそめにはおもふ中とやいはれまし

一一五三　ひとり〳〵にねぬる夜の床

自　まちかくねたる様はおもふ中にみゆれと、枕はそむき〳〵也、さてなん

宗祇は「一人一人」を「そむき〳〵」という言葉で説明している。この「そむき〳〵」は源氏物語、夕霧巻に見える表現。落葉宮に心を奪われた夕霧は、雲居雁のもとを訪れても、上の空で話もしない。雲居雁は夕霧の様子に不信感を抱き不快に思い、二人は心通わぬ一夜を過ごす。その際の様子が「かたみにうち出でたまふことなくて、背き背きに嘆き明かして」と表現される。互いに何も言わず、背を向けあって夜を明かす様子である。

「一人一人」の連歌での用例は、はやく宝徳四年千句に見られ、宗祇自身も文明六年に使っている（語釈「一人一人」例句参照）。これに対し、「背き背き」は、連歌ではやや遅れて宗長、宗碩の頃に用いられる。「背き背き」を連歌で用いた例としては、東山千句第十百韻

41おもへともそむき〳〵の中はうし　雪
42さかしらあるそ恋はくるしき　宗碩

宗長・宗碩両吟の『伊勢千句』第五百韻

70つらきしゝまにまけぬ夜そなき　宗碩
71我もとてそむき〳〵にふし侘ぬ　宗長

などがある。『伊勢千句注』は、71句に対して、「無言をしてそむき〳〵にねたる也」と注する。

なお、宗祇の源氏注釈書には「背き背き」の注は見えない。

（三折・裏・三）　一人一人に寝ぬる夜の床
六七　ゆきつれし人はいづくのかり枕

【校異】かり枕　②⑤草まくら

【式目】羇旅（かり枕）　「旅の心、…草まくら…かり枕かりね…」（連珠合璧集）

【語釈】○**ゆきつれし**…つれだって旅をした。「旅人のしるもしらぬも行つれて／関の戸さゝぬ御代にあふ坂」（看聞日

記紙背応永二十四年十一月二十三日賦唐何百韻・89／90・庭田重有／椎野）。「たのむかけにも身はをくれけり（つゝ）／行つれし人はやとりにさきたちて」（葉守千句第二百韻・60／61・宗友／恵俊）。○**かり枕**…旅寝すること。「庭中のあすはいつくのかり枕／こ柴折かけ陰にぬる人」（河越千句第六百韻・63／64・長敏／心敬）。

【付合】前句の「床」を旅先の仮寝の床とし、同じ道をたどる旅人たちの、それぞれの歩みで進む旅の様子を付けた。

【一句立】連れ立って来た人は、どこで一夜の宿をとっているのだろうか。

【現代語訳】それぞれ思い思いのところで寝ている旅の夜の床。連れ立って来た人は、どこで泊まっているのだろうか。

（三折・裏・四）　ゆきつれし人はいづくのかり枕

六八　とはばや月にこゆる奥山

【校異】こゆる　⑥みゆる

【式目】秋（月）　羇旅（こゆる）　奥山（山類・体）

【語釈】○**とはばや月に**…月に尋ねたいものだ。月は空から地上を照らしており、地上の様を俯瞰することができる位置にある。「ながむらん梢もさそな明石がたとはばや月に岡の辺の宿」（雪玉集・岡上月・1233）。ほぼ同様の内容の付合に次のものがある。「おくれにし友はいつくに草枕／とはゝや月に獨かもねむ」（延徳四年一月二十二日何路百韻・39／40・領重／宗長）。○**こゆる奥山**…越えていく奥山。奥山は世捨て人が身を隠すような人里遠く離れた地であり、夜の奥山は月の光だけがたよりの暗く恐ろしい場所である。しかもそれを越えていくのはさらに困難を極める。「旅の心、…山こえて」（連珠合璧集）。「をらずしてゆかんものかはをちこちのはやまおく山よるはこゆとも」（長能集・神無月にくらまにまうで侍りしに、もみぢいとをかしく侍りしかば・108）。「故郷は木の葉散るより道絶えて／奥山いかに雪深き頃」（新撰菟玖波集・冬・1234／1235・中原師冨）。「猶うきことは奥山もなし／鳥の音も聞えぬ計かくす身に」（萱草・人〳〵前句を十句して付侍し連歌のうちに・1423／1424）。

【付合】旅する間に離れてしまった旅の道連れがどこにいるのか、夜になって探す気持ちを付けた。
【一句立】月の光の下、奥山を越えていくが、月にたずねてみたいものだ。
【現代語訳】道連れだったあの旅人はどこに宿をとっただろうか。月に問いたいものだ。私はその月を道しるべに暗い奥山を越えて行くのだ。

（三折・裏・五）　とはばや月にこゆる奥山
六九　秋ごとのそのあらましは道もなし
【校異】道　①道（脇イ）　の③に（の）　⑦に
【式目】秋（秋）　羇旅（道）　あらましに有字〈或説、一向不可嫌之。〉（可嫌打越物（肖柏追加））　道与道（可隔五句物）
【語釈】○**秋ごとの**…秋になるたびの。物みな枯れて、寂しさが極まる秋は、出家の希望も高まる。○**あらまし**…未来の希望。ここは出家の予定。「あらまし」で、付合の意味からも出家の希望とみて詠む用例は、宗砌から心敬、宗祇にかけて多く見られる。「人もしれ折々深きこころざし／わがあらましは大原の奥」（宝徳四年千句第六百韻・51／52・金阿／宗砌）。「いつかはと思ひ馴ては過る身に／我あらましは奥のおく山」（初瀬千句第八百韻・39／40・日晟／弘阿）。「身をかくすこそ世にはまれなれ／あらましや皆偽（いつはりと）になりぬらん」（美濃千句第六百韻・12／13・専順／宗祇）。○**道もなし**…なす方法もない。前句と合わせた時には、「道」は羇旅の言葉の意味が強くなる。「旅の心、…みち」（連珠合璧集）。「そむく世にいつおもひたつ道もなし暮るる日ごとにあすはたのめど」（続千載集・雑下・1975・行蓮法師）。
【付合】「暗きより暗き道にぞ入りぬべき遥に照せ山のはの月」（拾遺集・性空上人のもとに、よみてつかはしける・1342・和泉式部）を意識し、「月にこゆる奥山」を仏教的な比喩を含む情景として考えた。有為の奥山を越え、真の悟りの境地に入りたい希望を詠む。月から秋が引きだされる。
【一句立】秋になるたびに心にうかぶその予定は、実現させる道もない。

【現代語訳】真如の月に導かれて、迷妄に満ちた暗い奥山を越えて、悟りの地を訪ねたいものだ。しかし、月の時期である秋になるたびに心に浮かぶ出家への思いは、実現させる方策もない。

【他出文献】老葉（吉川本）1487

（三折・裏・六）　秋ごとのそのあらましは道もなし

七〇　花を心に分くる宮城野

【校異】花　⑦萩ィはな

【式目】秋（花・宮城野）　旅（分くる）

【語釈】○**花を心に**…花を心に思いながら。花を心の中で想像するので、ここは心の花。また、秋の句の第三句目であり、次句も「露」が詠まれた秋の句であることから、一句を秋の句と見ると、宮城野の句ゆえに、一句では萩の花のこととなろう。○**分くる**…野原を分けて進んでいく。「旅の心、…野を分て山を分て」（連珠合璧集）。「あはれいかにたびゆく袖のなりぬらむ木の下分くる宮城野の原」（秋篠月清集・十題百首・地儀・217）。○**宮城野**…陸奥国の歌枕。現在の宮城県仙台市にあった。萩の名所。「宮城野やこれよりほかのみちもがなわくるもをしき秋萩の花」（臨永和歌集・雑上・625・藤原為嗣）。「こきまぜし柳桜を宮城野の秋の錦ぞ春にまされる」（松下集・九月一日外郎二位祖田すゝめにて三首歌合に　名所萩・1460）。

【付合】付句は、宮城野の句に、萩とも桜ともとれる「花」を詠み、前句で示された秋の季節を続けながら、春の時期を想う詠として付けた。季節感がゆらぐ幅広さを持つ付句である。なお、秋の句の第三句目であるが、第六八句に「こゆる」、第六九句に「道」、本句に「分くる」と、この句まで旅のイメージも続いている。

【一句立】花の時期の様子を想像しながら、分け進んでいく宮城野。

【現代語訳】秋になるたびに浮かぶその望みは、実現させる道もない。春の花を心中想像しながら、分け進んでいく、

道もない宮城野。

【補説】花を心に思うという発想から、萩の花の盛りを詠み、そこからから桜の花の幻へと転換していく連歌は、紫野千句に用例がある。

八　霜のふるえの萩の冬枯　　重貞
九　われにうき心の花のうつろひて　全誉
十　今はとはれぬ春にそ有ける　　有長

【他出文献】老葉（吉川本）1488

（三折・裏・七）　花を心に分くる宮城野
七一　しげりあふ木の下露に立ちぬれて

【校異】なし

【式目】秋（露）

【語釈】○**しげりあふ**…元来は夏の草木の様子を表す表現である。葉が多く茂り重なりあっているさま。「しげりあふこのしたつづくみ山ぢはわけ行く袖も涼しかりけり」（玉葉集・夏歌とて・434・平維盛）。「茂りあふ末や千枝のむら柏」（自然斎発句・夏・近江国にて・516）。○**木の下露**…木からしたたり落ちて衣を濡らす露。次にあげる古今集1091の例にみるように、「しげりあふ」葉からは、雨のように露が落ちる。「みさぶらひ御笠と申せ宮城野の木の下露は雨にまされり」（古今集・東歌・1091）。「宮城野の木の下露も色見えてうつりぞまさる秋萩の色」（続拾遺集・秋上・萩をよませ給うける・250・太上天皇）。「花もにしきをゝるや秋草／紅葉する木の下露は先ちりて」（小鴨千句第五百韻・2／3・之好／賢盛）。○**立ちぬれて**…立っているとしとどに濡れて。秋の鹿などが立ちつくしている様に使われる。はやく「あしひきの山のしづくに妹待つと我立ちぬれぬ山のしづくに」（万葉集・巻二・大津皇子、石川郎女に贈る御歌一首・107）

があり、宗祇は『万葉集抄』でこの歌をとりあげ、「山のしづく」を二度繰り返す点に関して「切なる所いはんためなれは、二度いへる事殊勝なる物をや。」と言う。「宮城野の木の下露に立ちぬれていく夜か鹿の妻をこふらむ」（新後撰集・秋上・題知らず・317・飛鳥井雅有）。

【考察】「宮城野」は、木の下露の落ちる林も、萩の花咲く野原も共に詠まれている。顕昭『古今集註』の1091番歌註は、「教長卿云、宮城野ハ野原ニテイトコトシゲシ。西ハミヤマニテ、東ハウミナレバ、山ギハヽ木ノカゲニテ、北南ヘ路ハヽベリ。ミチヨリ東ザマニカタサガリニテ、ハル〳〵ト野ベニテ、ハギヲミナヘシヨリハジメテ、秋ノ草花オヒシゲレリ。カヽレバツユモシゲキヲ、アメニマサレリ、カサヽセトイフナリ。」と記す。樹下の露の様は古今1091番歌で知られるが、野の草の露も、「あはれいかに草葉の露のこぼるらむ秋風たちぬ宮城野の原」（新古今集・秋上・300・西行法師）など多く詠まれる。いずれも露の多さが表現される。

【付合】「宮城野」から前掲古今集1091番により、「木の下露」が導かれる。「御さぶらひトアラバ、御かさと申せ　宮城野木の下露」（連珠合璧集）。「移りあへぬ花のちくさにみだれつつ風のうへなるみやぎのの露」（最勝四天王院障子和歌・宮城野陸奥・436・藤原定家）「秋はぎの花さきしより宮城野のこのした露のおかぬ日ぞなき」（玉葉集・秋上・宝治百首めされける時、萩露を・504・太宰権帥為経）などが参考になる。

【一句立】茂りあっている木々の下に立っていると、その木の下露にしとどに濡れてしまって。

【現代語訳】桜の花の時期の様子を想像しながら、木の下を分けて宮城野を進んでいく。茂りあっている木々の下露にしとどに濡れながら。

（三折・裏・八）　しげりあふ木の下露に立ちぬれて
七二　むすびもあかぬ水の涼しさ

【校異】あかぬ　②⑤⑥あへぬ　水　①水池イ

【式目】夏（涼しさ）　「夏の末の心、すゞしき〈夕すゞみ朝すゞみ〉…いづみ水をむすぶ」（連珠合璧集）　涼〈夏の外（又一）有べし（と云々）〉（肖柏追加）

【語釈】○**むすびもあかぬ**…いくら手ですくってもすくい飽きないこと。校異にある「むすひもあへぬ」ならば、手ですくうこともできない様子。「夏山の滝の白糸ながき日にむすびもあかぬ水のいろかな」（後鳥羽院定家知家入道撰歌（家良）・夏・143）。「しの原や行てに風のそよぎきて／木のもと涼しみづむすぶそで」（三島千句第九百韻・81／82）。○**水の涼しさ**…水の清涼さ。「草ふかきもりのしげみに日は落て／田中によどむ水のすゞしさ」（三島千句第六百韻・65／66）。宗祇はこの句をよく使い、『老葉』等にも見られる。→第七三句【考察】

【付合】前句を夏の木々の様子とし、木の下の露に濡れながら、流れる水辺で手に水をすくうさま。「むすびもあかぬ」ならば、夏の暑さが強調され、「むすびもあへぬ」ならば水の冷たさが強調される。滝の傍のような情景を考えればよいか。

【一句立】いくら手ですくってもすくい飽きないくらいの水の清涼さであることよ。

【現代語訳】茂りあっている木々の下、その木から落ちる露に濡れながら立っている。手にすくう水は、いくらすくっても飽きないくらい涼しいことよ。

【備考】日文研連歌DB「むすひもあへぬ」だが『宇良葉』所収本は「あかぬ」である。次の句と共に百韻の他伝本による独自訂正を入れているか。

（三折・裏・九）　むすびもあかぬ水の涼しさ

七三　住みなれて身もしづかなる峰の寺

【校異】住みなれて　①住馴ぬ（てイ）　⑤住なれし　⑥住なれぬ　峰の寺　③④⑦⑧古寺に

【式目】雑　峰（山類・体）　峰（一座二句物〈雖為名所可為二句之中〉）（肖柏追加）　寺（非居所・居所不可嫌レ之）

身（人倫）

【語釈】○**住みなれて**…長く住み慣れていて。「住む」に「澄む」を掛けるか。「住みなれし心うごかぬ古寺に／たゝむ石井の水の涼しさ」（老葉・雑連歌上・1087／1088）。○**身もしづかなる**…峰は人里遠く離れ、孤独で静寂な場所である。そのような場所に長く住み続け、心が静かであるのに加えて、身も穏やかなさま。漢語「閑身」による。○**峰の寺**…峰に立つ寺。「馴ぬる月に入あひの鐘／滝の音秋風寒峯の寺」（河越千句第五百韻・68／69・道真／長剥）。「越えぬる山や果てとなるらむ／人のわざ過ぐれば出づる峯の寺」（竹林抄・雑連歌下・1501・心敬）。

【付合】前句の「水」から「澄む」を引き出した。

【一句立】長く住み慣れ、またそれゆえに心も身も静かに澄ませることができた、そんな静かな峯の寺。

【現代語訳】いくら手ですくってもすくい飽きないくらいの水の清涼さであることよ。そんな水のように、自らの心も身も静かに澄ませ、ずっと住み慣れてきた静かな峯の寺。

【考察】付合に関しては、寺から水に移るものとして、「住みなれし心うごかぬ古寺に／たゝむ石井の水の涼しさ」（老葉・雑連歌上・1087／1088）がある。これに関して、宗祇は、『愚句老葉』において「うごかぬなどの縁にや、岩井をいひ出せり」と注している。この句も、寺の清水の涼やかさを清澄な水の流れる景色などから連想して、心静かに住みなしており、決して俗塵に染まらない峰の寺を詠み出したか。

【備考】日文研連歌DB「すみなれぬ」だが『宇良葉』所収本は「住みなれて」である。

（三折・裏・十）住みなれて身もしづかなる峰の寺

七四　夜深き鐘ぞ涙もよほす

【校異】鐘そ　①鐘に（そイ）

【式目】雑　鐘只一　入逢一　尺教一　異名一　（一座四句物）

【語釈】○**夜深き鐘**…あたりがまだ暗い早朝に鳴る鐘。「寺トアラバ、…鐘」（連珠合璧集）。「わすればや夜ぶかき鐘のつくづくとまてども人は音信もこず」（為家集・鐘・1959）。「とりよりさきに鐘ぞ夜ふかき／あふさかは誰かゆるしける関なれば」（菟玖波集・707・従二位行家）。○**涙もよほす**…涙があふれてくる。ここでは鐘の音が原因で心が乱れている。「み熊野や苔路の旅ねめもあはで／涙もよほすをこなひのこゑ」（三島千句第五百韻・57／58）。

【付合】寺に鐘を付け、時刻を夜明け近くに設定した。身も心も静かな境地にひたり、穏やかな世界を見せている前句だが、付句の鐘の音によって、その安定がこわれ、心が乱されていく。

【一句立】まだあたりが暗い、ごく早朝に聞こえてくる鐘の音に、涙があふれてくる。

【現代語訳】心も身も静かに澄ませ、ずっと住み慣れてきた静かな峯の寺。それなのに、まだあたりが暗い早朝に聞こえてくる鐘の音に、私は心乱れて涙があふれてくるのだ。

【他出文献】老葉（吉川本）821

（三折・裏・十一）　夜深き鐘ぞ涙もよほす

七五　鳴く鳥を空音になせば声添ひて

【校異】鳴く鳥を　①鳴鳥の（をイ）　③鳴鳥を（も）　なせは　⑥なけは　⑦なせ□　添ひて　③⑥そへて　⑧添て

【式目】雑　鳥只一　春一　水鳥、村鳥等之間一、鳥獣と云て又一、狩場鳥、浮寝鳥、夜鳥等は各別物也（一座四句物）　空空だのめなど云ては此外也（一座四句物）

【語釈】○**鳴く鳥を**…鳴いている鳥を。明け方になり鳥が鳴き始めることで、時刻を知る。「鳥トアラバ、暁」（連珠合璧集）。○**空音になせば**…聞いていないことにすると。鳥の声を真似た鳴き真似が空音。孟嘗君が鳥の空音で関の戸を開けさせ、追手から逃れる、函谷関の故事が有名である。「関トアラバ、鶏」（連珠合璧集）。「夜をこめて鳥の空音ははかるともよに逢坂の関はゆるさじ」（枕草子）。「夜深き山におもふいにしへ／こえがたき関にそらねの鳥もがな」（萱

草・雑・1113／1114）。○**声添ひて**…声が加わって。「まだ出やらぬせきの旅人／とりのねも夜ぶかきさとに鐘なりて」（菟玖波集・3348／3349・法眼栄懐）。

【付合】早朝の鐘の音に涙するその理由を、恋人と別れたくないのに別れの時間がきたことを無情にも知らせるからだとして付けている。雑の三句目であり、恋へ移るための布石を打つ。

【一句立】鳴いている鳥を、あれは鳴き真似だとして聞いていないことにしていると、そこにまた声が加わってきてしまって（鳴き真似ではないことを認めねばならなくなってしまう）。

【現代語訳】早朝の鐘の声を聞くと、涙があふれてくるのだ。明け方に鳴く鳥を、あれは鳥の鳴き真似であると思いなして気づかないふりをしても、そこに鐘の声が重なっては、もう朝だと認識させられてしまうのだから。

【他出文献】老葉（吉川本）822

【訳注引用文献典拠一覧】

式目の引用は京大本『連歌初学抄』（『京都大学蔵貴重連歌資料集一』（平成一三・臨川書店）（連歌新式、新式今案共に））による。『連歌新式追加並新式今案等』を参考として挙げる場合は、木藤才蔵『連歌新式の研究』（平成一一・三弥井書店）所収太宰府天満宮文庫本によった。

【語釈】等における和歌の引用は、『新編国歌大観』『新編私家集大成』CD-ROM版を使用し、本文は断らない限り『新編国歌大観』CD-ROMによる。『草根集』は日次本（『新編私家集大成』所収書陵部蔵御所本）を使用し、詠歌年時がわかる場合には付記した。歌の理解に必要な場合には、『新編国歌大観』所収の類題本（ノートルダム清心女子大本）の表現も付記している。また、万葉集の歌番号は西本願寺本の番号によった。連歌等の引用は、以下に示す諸本による。

新撰菟玖波集…『新撰菟玖波集全釈』（平成一八・三弥井書店）、『連歌大観一』所収筑波大学本

証信偈…『教行心証』

寛正二年正月二十五日何路百韻「声そ花」…『連歌百韻集』所収静嘉堂文庫本
河越千句…古典文庫『千句連歌集五』（昭和五九）所収内閣文庫本
出陣千句…連歌DB
初瀬千句…古典文庫『千句連歌集一』（昭和五三）所収小鳥居本
小鴨千句…古典文庫『千句連歌集三』（昭和五六）所収小松天満宮本
老葉（吉川本）…貴重古典籍叢刊12『宗祇句集』（昭和五二・角川書店）
葉守千句…古典文庫『千句連歌集六』（昭和六〇）所収北野天満宮本
園塵第二…『連歌大観二』所収早大図書館本
永正二年八月二十二日玉何百韻…連歌DB
熊野千句…古典文庫『千句連歌集五』（昭和五九）所収静嘉堂文庫本
永原千句…古典文庫『千句連歌集七』（昭和六〇）所収菅原神社本
菟玖波集…『連歌大観一』所収広島大学本及び『菟玖波集の研究』（昭和四〇・風間書房）
基佐集…『連歌大観一』所収斑山文庫本
那智籠…『連歌大観二』所収（古典文庫第三七六冊）北野天満宮本
下草注…『連歌古注釈集』（昭和五四・角川書店）所収広島大学本
三島千句…古典文庫『千句連歌集五』（昭和五九）所収鶴見大学本
長享三年五月十一日何路百韻（さみだれは）…『宗祇の研究』（昭和四二・風間書房）所収大阪天満宮文庫本
愚句老葉…『連歌古注釈集』（昭和五四・角川書店）
専順宗祇百句付…『連歌大観一』
梵灯庵袖下集…『島津忠夫著作集第五巻　連歌俳諧資料』（平成一六・和泉書院）所収西高辻家本
宗祇袖下…『連歌論集二』（昭和五七・三弥井書店）
老耳…『連歌大観二』所収綿屋文庫本
看聞日記紙背連歌類…『図書寮叢刊　看聞日記紙背文書・日記』（昭和四〇・養徳社）

延徳四年一月二十二日何路百韻…京大平松文庫『集連』（7／シ／25）京大図書館リポジトリ画像
東山千句…古典文庫『千句連歌集六』（昭和六〇）所収内閣文庫本
伊勢千句…『連歌古注釈の研究』（昭和四九・角川書店）所収「伊勢千句注」（内閣文庫本）
文明六年年内立春何路百韻（春はまた）…『連歌百韻集』（昭和五〇・汲古書院）
紫野千句…古典文庫『千句連歌集一』（昭和五三）所収静嘉堂文庫本
自然斎発句…『連歌大観一』所収大阪天満宮文庫本
万葉集抄…『万葉学叢刊中世編』（昭和三・古今書院）
顕昭古今集註…日本歌学大系別巻四
竹林抄…新日本古典文学大系『竹林抄』（一九九一・岩波書店）

【参考文献】

廣木一人「「心の花」をめぐって――心敬の詞、連歌の方法」（『和歌文学大系』第66巻月報（平成一七・四・明治書院）

この訳注は、JSPS 科研費 JP17K02421「独吟百韻分析による宗祇連歌の多面的新研究」の助成を受けたものである。